

(地域医療を考える懇談会 詳細・感想文)
病院小児科の維持・継続に懸念



奥谷貴弘先生

奥谷貴弘先生は済生会兵庫県病院の医療体制や北区の人口・出生率などを紹介した。その上で、NICUのため

8人の小児科医がいるが、ワクチンの効果による入院患者の減少や小児科により一般小児科の患者数が減少し、小児科が継続・維持できるのか不安があるなど済生会兵庫県病院の小児科の現状と課題を報告した。

小児科の背景には医療や福祉の予算削減により、安心して子どもを産み育てる環境が整っていないことがありと指摘。特にひとり親の貧困率が高く、分娩後のフォローの場面で困難を抱えることが多いと語った。そして「小児医療は保険点数が低いことから不採算部門とされ、民間病院に補助金もなく、継続が困難になっている」と問題点を示し、「二次病院を地域に確保することは必要であり、地域住民と力を合わせて声をあげていくことが大切」とした。

病院と開業医との密な連携

高田幸治先生は「開業医から見た地域医療の課題と病診連携」をテーマに、済生会兵庫県病院との病診連携について報告した。

紹介率など連携実績や各科の特徴、社会福祉事業など済生会兵庫県病院の特色を紹介し、月1回地域の開業医との連絡会を開催しており、

病診連携はスムーズに行われているとした。病院統合で考えられるメリットとして、各科の充実により医師不足の解消や高度医療の提供が期待できる一方で、統合に伴う医療サービスの地域間格差の発生や、全く異なる組織形態の病院が統合することの難しさなどをがデメリットとして想定されるとした。



高田幸治先生

病院や地域の開業小児科医が疲弊



貞弘信行先生

貞弘信行先生は「私と北神・三田の小児科のこれまで」をテーマに報告。地域に在住・勤務・開業した経験から、北神・三田地域の小児科の歴史を振り返り、人口が急増する中、病院の整備が進んだが、時間外診療など病院小児科の負担が重い状況が続いてきたと振り返った。

開業小児科医が中核病院に望むこととして、①必要な時に入院させてもらえること、②耳鼻科・眼科などの境界領域各科の充実、③相談でき、最新の知見を教えてもらえる関係性、④地域の小児保健の同志の4点を挙げ、現状は、JCHO神戸中央病院で産科閉鎖、小児科医減少、済生会兵庫県病院で境界各科の医師不足など、多くの課題があるとした。病院統合が実現すれば、医師増等のメリットも考えられる一方、地

域密着が薄れる懸念があるとして、何のための誰のための統合なのか明らかにすべきと訴えた。

政府の財政支出で医療・福祉の充実へ

森岡芳雄先生は「進む病院統合～地域に求められる病院とは～」をテーマに、兵庫県下で進む病院統廃合の現状や国が進める政策について語った。

病院統合には医師不足や高度専門医療の提供などの表向きの理由があるが、根本には国の医療費抑制政策があることを指摘。医療・介護・福祉・教育の削減をやめ、患者負担の軽減と診

療報酬大幅引き上げを行うこと、医師数の絶対数不足を認め、医師の増員をはかることなどを保険医協会の提案として紹介した。



森岡芳雄先生

懇談会には、公立病院・私立病院・診療所の医師・歯科医師ほか、地域の住民も参加した。ディスカッションでは、北区で開業する医師や病院統合に反対する市民団体から市民不在の病院統廃合計画を憂慮する意見などが寄せられた。

参加者からの感想文

地域住民に不可欠な基幹病院

私は、勤務医の時から、保険医協会には入会していましたが、様々な研修会等には出席をしたことはありませんでした。しかし、この度は、私たちの地域に直接関係のあることでしたので参加させていただきました。

参加して初めてわかることもあり、地域基幹病院の現状などこと細かに教えていただき、今後の地域医療へどのように議論していくべきかを考えるきっかけとなりました。

地域の基幹病院は、地域住民にとってはなくてはならないものであり、維持できるように考え、議論し、実行しなければならないと考えます。現時点では、まだまだ議論する余地はあり、地域住民とも協力して議論していくことが必要で、具体的な方法を検討して、行政に働きかける必要があると思いました。

【北区 菊川 大樹】

＜研究会のご案内＞

高齢者の糖尿病対策
～安全かつ良質な糖尿病治療を目指して～

日時：5月11日（土）17：00～ 会場：兵庫県保険医協会会議室
講師：国立国際医療研究センター病院
糖尿病内分泌代謝科診療科長・第一糖尿病科医長 梶尾 裕 先生

参加費：無料

お申込み・お問い合わせは、078-393-1807まで